

はじめに

二〇二一年度文藝部刊行『然らば、後に』を手にとって頂き有難うございます。二年前の『然らば』

を刊行した時と、世間は大きく変わってしまいました。しかしながら、その混乱もようやく落ち着きました。見せ始めている今、我々が何を物語るのか、そう言う意味を込めてこのタイトルとしました。

昨今巷に蔓延る新型コロナウイルス、それによって失われた数々の日常。そう言った物と引き換えに、今だからこそ書ける文章を我々は書いたつもりです。

そう言ったお涙頂戴のセリフはこっちも言い飽きて

きます。これ以上は天井にもほどがあるので、とか

くは言いません。

文字数、ジャンル共に制限無しで、部員各々が完

全自由に書いた。強制されて出てきたわけでもない、

魂からの生の叫び声。

検閲無しの完全無修正版、是非とも楽しんでいっ

て下さい。

読んでいただけるだけで幸いです。

令和三年度 学習院高等科文藝部部长 蒙古山猫

目次

『Today is good day to ...』 二頁

蒙古山猫

『猫』 四十三頁

柊光溜

『怪し者払い』 二十一頁

渡月見

『旅』 五十二頁

割と大きめの足跡

『みかん』 二十七頁

元舜平大

『幸せです！』 五十四頁

正義の学級委員長

『家出少年』 三十一頁

黒川天

『たからばこ』 六十三頁

河野檸檬

Today is good day to ...

蒙古山猫

た。混乱しながらも見かけたベンチに腰を下ろした。

「ほんとに？」

「おじさんも、自殺しに来たの？それともわたしを止めに来た？」

階段を登り、屋上に出た私を迎えた第一声はそれだった。

「どっちでも無いよ。私は、そう夜空を見に来たの

さ。こんなにも綺麗な夜空は最近見る事が出来てなかったからね」

咄嗟に答えたものの、正直な所訳が分からなかった

「ああ、本当だとも。なんたつて私は屋上には誰も居ないと思ってここに来たからね。ここにはもう何

年か前から、毎週金曜日の夜に來ているんだ。けれど今日ここで君に会うまでは、誰とも出会ったこと

は無かったから」

「ああ、じゃあおじさんの方がずっと先客だったんだね。わたしは月曜日の夜から毎晩ここに來てたん

だけだね、その間誰とも会わなかったから。ここは

穴場スポットだと思ってたんだけど」

「毎晩？こんな時間に一人きりで此処に来ていたの

かい？」

「うん」

なんて事ないように答える目の前の少女に、私はしばし口を開けなかった。

「――なんて不用心なんだ……」

「おーい、おーい大丈夫って、ようやく返事したと

思ったらお説教？親はどうしたって話？」

「いやいや、そんな無粋な事は聞かないよ。君は今、

死にたくて此処に来たんだろう？だったら、何も聞かない方がいいだろう」

これもまた、本心からの言葉だった。正直な所気にならない訳が無いのだが、それ以上に、悩んでここに足を運んでいる彼女にそれを聞くのは野暮な話だと思ったのだ。

「おじさんは、わたしが死にたくて此処に来たって分かってても。わたしを止めないんだね」

「薄情だと思うかい？」

「ううん、なんか新鮮。わたしがさ『死にたい』っ

て言うと、皆すぐに大袈裟に否定してくるんだ。『命

をなんだと思ってるんだ』とか『産んでくれた親へ

の感謝が足りない』、『お前はただ辛いことから逃げ

てるだけだ』、『死ぬなんて言わないでよ』ってね。

わたしは別に産んでほしいって親に願った訳でも無

いののに、漠然と死にたい訳でも、逃げたい訳でも無

いののに」

「君は、身近な誰かに死にたいって言ったのかい？」

「うん。それが？」

「それはすごいな」

咄嗟にそんな言葉が口から飛び出した。

「なーに？おじさんはお説教じゃなくて嫌味？」

「いや、そんなつもりはないんだ。ただ、本当に、

心の底からすごいと思ってしまったんだ。まるで小

学生みたいな感想になってしまいがね。君があまり

に素直な子だったから驚いてしまってたね」

「なに？子供っぽいって事？」

どうやら機嫌を損ねてしまったようだ。

「そんなことはないとも。ああそうだ。どうせなら、

なんで死にたいと思うようになったのかを私に教え

てくれないかい？あくまで興味本意なんだけどね。

今日会ったばかりで、今後会わないだろう私相手だからこそ言える事もあるだろう」

言った直後にはもう後悔してしまう。当人が言うのも変な事だが、かなり気持ちが悪い事を言ってしまった。彼女も呆気に取られてしまっている。なんと言ったら誤魔化せるだろうか。

「いや、変な事を言ってしまったね。すまないが忘れてくれて構わな」おじさんが望むような面白い話なんかじゃないと思うけど？」え？」

「どうしたのおじさん？興味あるんじゃないの？」

「あ、ああ。勿論興味はあるとも。ただ、今の私の発言はかなり、気持ちが悪い物では無かったかい？」

「まあ。正直な所、けっこう気持ち悪かったよ」

当たり前の事だが、面と向かって言われるとかなり心に来る物がある。

「でもま、話しても良いかなって。確かに言葉どおり、わたしとおじさんはもう会わないだろうし」

一呼吸おいて、少女は語り出した。

「わたしはね、『死』ってとっても綺麗な物だと思っ

てるんだ。特に『自殺』なんて物は、自分と世界全部の心中って言えると思うんだよね。だって、わたしが認識出来無くなるって事は、わたしの中では全員死んじゃったことになるんだから。それこそ、両親も、友達も、先生も、総理大臣も、おじさんも。

わたしが関わった人、これから関わる人。全部全部わたしの中で殺して、わたしはその人達を殺したって記憶を持って死んでいくんだよ。なんだかとても綺麗な事のような気がしない？」

そう言い切って振り返る彼女は、ありきたりな表

現だが、とても美しく見えた。歳の離れた少女にこんな事を思うのは変な事かもしれないが、死に魅入られた人と言うのはここまで魅力的な物かとしばし見蕩れてしまった。

「君の意見には概ね賛成だね。確かに、自殺とは世界との心中と言えるかもしれない。それは、とてもとても、綺麗な事だと思う。ただ、私は大人として君の自殺を止めなければいけないと思っている」

「賛成するのに死なせてはくれないの？」

「大人ってものは面倒な生き物でね、目の前で死に

たがっている少女一人が死ぬのを、はいそうですかと黙って見過ごす訳には行かないんだよ」

少し溜息をつきながらポケットから煙草を取り出し、口にくわえる。

「おじさんタバコ吸うの？」

「まあね」

火を付け一口吸って、煙を吐く。

——今から話すのはたわいの無い話で、しがない一人の大学生の話だ。

——ある一人の男がいてね。そいつは当時大学生三年生で、まあそれなりに楽しい大学生活を歩んでいた。

親元から離れて慣れない一人暮らしの中で、必死に大学に通い。単位も粗方取り終えて、サークルの引継ぎも済んで落ち着きつつあり、ぼちぼち就職活動に目を向けるか、なんて考えていた。

とにかく薄情な男で、中学生時代の同級生が今頃どうしているかなんて考えていなかった。まあ、普通なら昔の同級生の事を忘れていたって当たり前か

も知れないけどね。

ただ、男の場合は少し事情が違っていったんだ。中学生の同級生、なんて言うが実際のところは言ってしまうえば幼馴染だ。

男と幼馴染の女は一時は恋仲の様にもなったが、結局長続きはしなかった。とは言っても、その別れ方は決して喧嘩別れ等では無かった。

もとよりその関係は、幼馴染の少女から自分は同性愛者かも知れないと相談を持ち掛けられた事が切っ掛けで始まった、周りと話を合わせる為だけの

見せかけのカップルだったからだ。これでは、恋仲と言うのには不十分かもしれないが、まあ聞き流して欲しい。

では何故、その関係が崩れたのかと言うと、純粹に大学生になる時に距離が離れる事が分かったからだった。

なに？話が長い？ああ、ここからは少し巻いて話して行こう。

簡潔に言えば彼女は死んだ。自殺だったそうだと。原因はまだわかっていない。在り来りな事を言え

ば、同性愛者に対する心無い言葉が彼女を傷付けて

いたのかもしれない。だが、その頃になるとろくに

連絡を取ろうともししていなかった自分が、彼女の死

の原因を探ろうつてのも、そも無理な話だがね。

飛び降り自殺だったらしく、遺体の損傷が激し

かったせいで、葬式では遺影でしか見られなかった。

最後に顔を合わせたのはたしか、成人式の時だった

か。

その葬式の後で彼女の母親から俺宛の遺書を渡さ

れた、内容は俺に対する感謝と贖罪。それと俺に対

する、生きて欲しいと言う願いだった。

それを読んで俺は、思い返してみれば、俺は奴に

恋していたんだろうと気付いた。馬鹿げた話だが、

その時になって今更、何故もつと連絡を取っていな

かったんだと後悔し始めていたんだ。随分ややこし

く、長い、報われない初恋だったよ。今になって思

えば、初恋に気づかなかったのは自分なりの防衛本

能だったのかも知れない。と思える様になったのだ

けどね。

まあ、その時、その、自身の初恋を自覚した途端。

彼女からの感謝の言葉も、贖罪の言葉も全部。全部

が叶わないと知りながら、もしかしたらと下心を

持つて彼女との日々を過ごした俺に対する罵声に変

わっていく様な気がした。

とかく不誠実で薄汚かった自分に、彼女は無邪気

に感謝を告げ、あまつさえ謝罪の言葉を遺している

のだ。その事を訂正し、自身の持つ薄汚い直情的な

欲望を伝えるべきなのか、彼女にとって美しい記憶

で終わらせるべきなのか。それすら分からなかった、

最終的には「最早彼女に真実を打ち明ける事は出来

ないのだから」なんて言い訳してそれ以上考えない

ようにしていた。

確か、その時初めて、俺は死にたいって思ったん

だ。彼女の純粋な感謝と謝罪を、自身の罪を棚にあ

げて、厚顔無恥にも受け取ろうとしている自分に嫌

気がさし。もし死ねば、彼女に自身の罪を打ち明け

られるのかと思い。彼女が自殺したっていうこの屋

上まで、金曜日の夜になると死のう死のうって息巻

いて階段を登って。それでも生き汚い自分は、一段

一段登る事にそんな気も削げていく。結局、屋上で

漠然と時を過ごす事しかし無くなり。惰性で金曜日

の夜に此処に来る様になっていた、初めの頃を持つ

ていた目的も忘れてしまっていたんだ。

てみれば、確かに私は此処に死にに来たんだろう」

「ダメだよっ」

少女は呆気に取られているようで、何となく悲し

そうな顔をしていた。

「私の自殺を止めるかい？」

「いや、わたし、もう、いろんなことがあたまんな

かでグルグルしちゃって。なんか、もう、わかん

い事だらけで、もう、どうしたらいいのか」

ていた。

「ははっ、それも仕方ない事だよ。こんなおじさん

「それも今日、君の言葉を聞くまではね。思い返し

の汚い身の上話を聞かされたんだ、もとより興味も

無かっただろうしね。混乱してしまつて当然だよ」

もう一度煙草に火を付け、一口吸う。

「ああ、そうだ。この煙草も私の自殺の一環だよ」

「タバコが？」

「よく、煙草一本で寿命が何分縮むとか言つてゐるの

を聞かないかい？」

「聞いたことあるような気がする」

「自分から命を投げ捨てる勇氣は無かつたからね、

少しづつ身体を痛めつけて行く煙草を吸い始めたんだ。

私はこれを消極的自殺と呼んでるよ」

少しおどけた調子で私は言う。ずっと自殺の意志

を持つて吸つていたかの様に言つたが、今になつて

吸い始めた理由を思い出しただけだつた。思い返し

てみれば、煙草を吸い始めたのはあの葬式の後から

のような氣もしてくる。

「なんでこんな思い出話をしたんだつたかな？ああ、

そうだ。君の自殺を止めようとしたんだつた。ふふつ、

逆に私の自殺を君に止められてしまったね」

最初の思惑に対して、自分の行動の結果が真逆の

成果をもたらした事がなんだか面白かつた。自分は

いつもこんな事ばかりな気もしてくる。

「おじさんは、その人の事を今も愛してるの？」

「勿論。と、言いたいところだけどね。本当のところ

かどうかは分からないな。私の中で彼女の存在はも

う不確かな物になってしまったからね、恐らくもう

私は彼女の事を愛していないんだと思うよ」

「そうかな」

「そうだともし

少しの間、沈黙が広がる。

「さあ、もう夜も深けてきた。こんなおじさんの恋

話なんて聞いてないで、はやく帰りなさい」

「えっ、もうこんな時間。はやく寝ないと」

私の言葉に反応して慌てて時間を確認する彼女は

なんだか、幼く見えた。自殺の美しさについて語っ

ていた時の面影は、跡形も無くなっていた。

「まだ、君の中で自殺は美しい姿を保っているか

い？」

ふと、聞いてみたくなっただけで、返事は特に求

めていなかった。

「なんだかそこまで綺麗な物じゃ無いかもって思っ

て来た」

「そうかい、それならよかった」

一口煙草を吸って、煙を吐き出す。

「じゃあねーおじさん。また来週、金曜日の夜に、

此処で待ち合わせね」

「ああ、会えたらね」

彼女がドアを開けて、屋上から出て行く。

屋上に静寂が満ちる。

立ち上がって屋上を歩き回り、端から下を見ると、

通りを彼女が歩いているのを見かけた。こちらを見

ているようだったので、手を振ってみると大きく振

り返した後、こちらに背を向けて走っていった。

「元気だなあ」

感嘆の溜息を一つ吐いてベンチに座り直す。

「私は上手く騙せただろうか」

さっき自分が少女に騙った物語は、殆どが事実

だった。だが、いくらか嘘が混じっていた。私は、

今日初めてこの屋上に来たのだ。会社を辞めて、僅

かばかりの貯蓄を実家に送って、アパートを引き

払って、死ぬ為の準備を終えて、此処に来たのだ。

彼女が逝ってしまったこのビルの屋上に。階段をのぼる度に、決意を鈍らせながら。

「まさか、先客がいるとは思わなかったな」

もし仮に、あの少女と同じ日に死んでしまつては、世間から心中と思われてしまうかもしれない。

あの少女も死後になって、知らないおじさんとのありもしない絆を探られるのは嫌だろう。

「話してみると本気で死ぬ気では無かった様で安心したよ」

誰に向けるわけでも無く、口から言葉が零れてい

く。自分の声を聞くのもこれで最後だと思うと、なんだか恋しく思えて来る様な気がする。

「何もかも言い切れない事ばかりだ、それも自分の感情ですら。未だに、この歳になつても」

そう考えると、あの時自信の持つ死への憧れを言い切っていた少女は凄いなものだ。と、思う。例えばそれが、若さ故の過ちや勘違いと言われる様な物であっても、それが出来る事自体が、若者の特権と言えるのかもしれない。

「大人になると、兎に角失敗を恐れてしまう。体裁ばかりを取り繕っては、自分を知ろうとする努力を忘れてしまう。真実を、事実を口に出せなくなってしまふ」

今の私は思い出の中の彼女には相応しく無いだろう。此処で死んだ所で当然、彼女に会う事など出来無い。

だが私は、それ以上に
「疲れきってしまった」

死にたい訳でも、何処かに行きたい訳でも無いけ

れど。生きる希望がある訳でも、帰りたい場所がある訳でも無い。だが、少女の言葉を聞いて、心が持ち方が、自殺への意識が変わった。

これ以上生きていても、襲ってくる苦しみに対して圧倒的に数が少ない綺麗な思い出を一つ一つ、代償のように支払って行つて。死ぬ頃には楽しい思い出や美しい思い出なんて一つも無く、孤独に死んで行くだけなんだと確信する。

「自殺は世界との心中、か」

立ち上がって柵の方に歩いて行く。

「やはり、いい考え方だ。だから、私はこのまま、

学生時代のくだらない思い出も、苦しい思い出も、

苦しい思い出も、友情も、彼女との思い出も。今日初

めて会った、あの少女との思い出も。全部全部が、

煌めいている間に、誇れる間に、埃を被ってしまう

前に、苦しみで覆われてしまう前に、憎しみに変わっ

てしまう前に、忘れてしまう前に」

ひと息ごとに一歩づつ、柵に近寄っていき柵に辿

り着いた。柵を乗り越え、街を見下ろす。

ああ、やはり世界は美しい。星は少なくとも確か

に目視出来る、月も輝いてる。視線を降ろせば、暗

闇の多い街中やビルの窓の中で僅かに灯る光に人の

息遣いを確かに感じられる。

どれもこれも美しい、掛け替えのないもの達だ。

こんな綺麗な世界と心中出来るんだから、俺は幸

せものだろう。

へりに立ち、空を見上げる。

「こんな時はなんて言うんだったかな、ああそうだ。

“today is a good day to die” だった気がする、使

方は違いかもしれないけど、今は正しくそんな気持

ちだ」

屋上には誰も残っていなかった。人の息遣いは感じられず、いつも通りの静寂が広がっていた。

あとがき

今年は何だか全体的に雰囲気暗い作品が多くなってしまっている(自分も含め)気がしたので、一昨年の作品とかを見返してみると例年と同じくらいの仄暗さでひと安心です。

部長らしく凝った作品目指して頑張ってみるかとも思いましたが、結局普段通りの作品になりました。べ切に間に合ったので一年生の時より進歩はしていますが、同時に自分がべ切を設定できるようになっているので最早私にべ切は存在し

ていません。今の私は無敵です。(ちなみにはじめに設定した夏休み明け、と言うべ切には間に合いませんでした)

ご意見ご感想等ございましたら、是非ともお申し付けください。読んで頂きありがとうございます。

怪し者払い

渡月見

ある山奥の寺から少し離れた森の中、私は川に流れている清水を以って自身の身体を清めていた。今日も変わらず、寺を狙う怪しき者を払うためにじっと息を潜めるのである。

もう遠い昔の話になるが、かつてこの地は怪しき者たちが蔓延る未開の地であった。そこに私が今日守役を務める寺の衆がやってきて、

人々が安心して暮らすことができるようにこの地を切り開いたという。しかし、寺の衆が切り開いたとはいえ怪しき者が完全にいなくなつたわけではなかつた。

その後、寺の衆によつて住処を奪われた怪しき者たちはその恨みをぶつけるかの如く、人々が住まう所に現れては田畑を荒らし、山へ帰つていった。寺の衆が切り開いたばかりだったこの地で田畑を荒らされることの影響力は無視できないもので、寺の衆もこのことに頭を悩ま

されていた。そこで、その怪しき者を退ける術

を持つ私に寺の護衛を依頼したのである。

当時、数少ないこの怪しき者たちを払う術を

持っていた私の存在は人々に重宝されたのか、

その後今日に至るまで私を解雇しようとする

者はいなかった。特に今日では私以上に怪しき

者を払う力が強い者もいるというのに、私がこ

こにいられるのは偏に寺の住職のおかげであ

る。本当に住職には頭が上がらない。この恩を

返すために、私は今日も怪しき者を払うのであ

る。

とはいえども、いままで多くの怪しき者を

払った私には、一つ怪しき者たちに思う所が

あった。人々が安全に住まうために寺の衆はこ

の地を切り開き、怪しき者たちを森の奥に追い

やった。その所為で人々は暮らしに安寧という

幸福を手に入れることができた。しかし、それ

は元々暮らしていた怪しき者たちの安寧を

奪ったことに他ならないのではないだろうか。

そう考えると、私は元の安寧を取り戻すために森から現れた勇ましきもの達を無情に追い返す、心なき軍人のように思えてきたのだ。この考えに至ったのも、ある怪しき者との出会いがきっかけであつた。

ある夜、私はこちらに向かって来る一つの影を見た。あの森の奥に人々は住んでいない。十中八九怪しき者だろうと見当をつけた私は払う術を準備して待ち構えていた。その見当通り、森の奥から一つ、怪しき者が現れた。

「怪しき者よ、其方にも私の考え及ばぬ思惑があるやもしれぬが、これが私の務めだ。恨むなよ」

そう心中で思いながら、私は術を執行した。この術をくれば怪しき者はすぐに森の奥へと逃げ帰る。

ところが、その怪しき者はこちらの術に反応することなく、ただこちらをじっと見ていた。私の術が効いていないのは明白だった。

これには度肝を抜かれた。なにせ、幾千もの

怪しき者を払ってきた私の術が効いていない

「言えぬ」

のである。こんなことは今まではありえないこ

「そうか、其方は外の者であったか」

とだった。

そう怪しき者は言うと言く口を紡ぎ、また私

これは厳しい戦いになるぞと警戒していた

に問うてきた。

私に、その怪しき者はこう尋ねた。

「今一度自身の仁義に問うてみよ。其方の行い

「其方は何故我らを払うか」

は其方の仁義に則ったものであるかを」

その目には怒りの感情は無く、ただこちらを

そう言う、その怪しき者は森の奥へと帰っ

哀しくみているようだった。

ていった。

「それが私の務めだ」

「寺の者共に雇われたか」

その呪いともいえるこの忠告は今日に至る

まで私の身を蝕んでいる。住職の恩に返すため

得させた。

に怪しき者達を払うのか、怪しき者の言葉に耳を傾けるべきか、今日もその二つの願いの板挟みにされているのだ。

：何を言っているのだ私は。私が今日こうして居ることができるのも住職のおかげではないか。怪しき者を払わなくなった私に居る場所などない。だからこれから怪しき者達を払うのだ。払い続けるべきなのだと無理矢理自分を納

ふと森を見ると、一つの影が見えた。そこに

は小さな怪しき者がいた。大人であろうが子供であろうが、私のやることは変わらない。術を使い、怪しき者を払うのだ。そう決心して、清水で体を清めた私は清水を捨て、術を行使する体制に移る。自身の身は舞い上がり、その身を怪しき者に向かって一気に振り下ろした。

その時、森の中で一つ、カコーンという甲高

後書き

い音が響き渡った。

高一と高二の時に書いた文章は結構暴走
気味だったので、今回は少し丁寧に書くこ
とを意識しました。ちなみに、この主人公
は獅子威です

みかん

元舜平大

この学校にはええつと……数えられない程の

部・同好会が存在している。その中で唯一、学園外が主な活動場所の団体がある。ボート部だ。

ボート競技。ボートと言われると、モーター

ボートを思い浮かべる人も少なくないだろう。し

かし、ボート競技と言ったら所謂手漕ぎボートの

ことを指し、日本語では漕艇または端艇と呼ぶ。

毎年春に行われる早慶レガッタが有名だ。今回は

そんなボート競技のお話？

自由な校風と専攻の多さで人気の音ノ浦学園。

活動場所である、昔のオリンピッククのために作られたらしい競技場は、学園から徒歩一時間くらい離れているが、部員は皆、ランニングで向かい、鍛えている。ちなみに帰りは、歩いて二十分程のバス停から帰っている。

実はこの競技場、閉鎖の危機に陥っている。

理由はアクセスの悪さ、莫大な整備費による大赤

字だ。バス停まで徒歩二十分もかかるのはかなり

遠いと言わざるを得ないし、バスが結ぶ駅も都心

から離れた臨海地域にあり、そもそも駅までが遠

い。また、整備費についてだが、貝の対策、水質

の問題など、挙げるときりがないのでやめるが、

問題だらけであった。水質の悪さで、国内大会で

さえ別の所でやるようになり、赤字は膨れ上がる

一方だった。これは音ノ浦のボート部員にとって

も死活問題だ。どうにか人を集められないかと考

えを巡らす、果たして何か思い付くのだろうか。

このお話は完結していません。現在進行形で起

きている問題です。あなたならどうしますか？

おまけ

「ボートは後ろには進まないの、前に進んだのではないか」

これはオリンピックの会場選考時に、当時の知事が言った言葉だ。しかし、実際のボートは基本的に後ろへ進む。一人だけ反対を向いているCOX(コックス)は前に進むが、この人は漕がない。指示を出したり、舵を切ったりする役だ。これは知事の仕事のようなもので、言い得て妙かも

しれない。

伝えたいのは、漕ぐだけがボートではないということだ。COXは四人漕ぎや八人漕ぎの競技にあるポジションで、この人は漕がない。しつこいようだが、漕がない人である。つまり四人漕ぎは五人、八人漕ぎは九人を乗せて漕ぐことになる。その一人分の重さを増やしてでも必要なポジションなのだ。

後書き

お読みいただきありがとうございます。

今回ボート競技、海の森を取り上げましたが、

理由は二つあります。

一つ目はボート競技に興味を持って欲しいからです。本文にも書いた通り、日本においてボ-

ート競技はマイナーな競技です。実際に見たり、

やったりしたことがある人は少ないでしょう。し

かし、ヨーロッパやアメリカではとても有名なス

ポーツで、オリンピック種目にもなっています。

ちなみに日本は国際大会でかなり弱く、オリンピックの出場権すら危ういです。

二つ目は海の森を知って欲しいからです。オリ

ンピックの後、海の森は大赤字になるそう。他のオリンピック会場も、その後が問題視されていま

す。気になる人は調べてみてください。

一人でも多く、ボート競技や海の森のことを覚

えていただけたら幸いです。

家出少年

黒川天

その夜、俺は電車に乗っていた。その中で俺は

眠ってしまったていたらしい、目が覚めると隣では

弟の和也もぐっすり眠っていた。まだ目的地まで

は一時間以上もあることを確認して、また眠りに

つこうとした。が、眠れない。夜の星を見ると、

とても綺麗だったので、しばらくそれを眺めるこ

とにした。思えば、こんなに綺麗な星をみたのは

いつぶりだろうか。最近、夜に見ていたのは父親

のだらしない顔ばかりだった。そんなことを思い

ながら、僕はこの家出に至るまでの経緯を思い出

していた。

「おい、柴岡」

放課後に帰り支度をしていると担任の加藤が

話しかけてきた。

「進路志望についてはなしたいのだが……」

「それなら、昨日、プリントで提出した通りです。

志望校なんてありません」

「お前なあ、あれだけの成績を残しといて、高校にすら進学しないなんて、もったいないぞ！」

その言葉が加藤の口から出た瞬間、俺は気がつけばバックを持って教室から出ていた。

“もったいない” いい加減、そのワードは聞き飽きた。今日までで、何回耳にしただろうか。

特に、加藤はロボットか、つくくらいにそのワードを連呼する。まあ、先生たちの気持ちも分かる。

学年順位十位以内のやつが中卒っていうのは後味が悪いのだろう。まあ、俺には関係ない。

そんなことを思いながら家までの道のりを歩いていると、急に後ろから甲高い声が聞こえてきた。

「文秋ー！帰り道でしょ？一緒に帰ろう」

「結衣か、あんまり甲高い声を出さないでくれ」

「何よー！せっかく」Cが話しかけてあげたのにー」

「そうか、結衣は女の子だったか。いやー、知らなかったなあ」

彼女は睨んできたが、思いつきり無視した。相手にする気がないと分かったのか、ため息をつく

と、またいつものにこやかな表情に戻った。

「まあ、いいや！一緒に帰ろう」

「ダメと言っても、どうせ、最後までついてくるのだろう」

「まあ、わたしの家、文秋の隣だし」

「ほお、それはまた初耳だな」

「もう、そのボケ聞き飽きたんですけど」

それから、結衣の話を俺が適当に相槌を打ちながら、帰路についた。そして、あつという間に

波多野という表札のついたきちんとした一軒家

と、俺の住むボロアパートの前までやってきた。

何度も見るが、やはりこの差にはうんざりする。

「じゃあな」

「ねえ、文秋…」

「どうした？」

「本当に、高校には行かないの？」

「行かない、というか行けない」

「どうして？あんなに成績いいのに…」

「そうだな、なぜか、現役受験生のお前より、受

験生じゃない俺の方が成績いいもんな」

さすがの彼女もこの言葉にはムツとした表情

何度目だろうか。

を浮かべていた。

俺は、彼女の返事を待たずしてアパートの階段

を登っていた。

今日も、この家の扉を開けるのが苦しくて仕方

ない。しかし、開けねばならない。

「ただいま」

「おう、文秋か。和也はまだ帰って来ねえのか？」

こののんびりとした声に腹が立つのも今日で

るわけねえだろ、クソ親父」

「ふーん、あいつに新聞買ってくるように頼んだ
のだからあ」

「買い物なら、和也じゃなくて、俺に頼んでくれ。

あいつには、最低限のお小遣いしか渡してないん
だから」

正直、無職のおっさんに買い物頼まれるのは
相当腹立たしいが、この場合なら、仕方がないと

いうものだ。

「なんだ？和也はバイトやってないのか？」

「小のがバイトなんてできるわけねえだろ」

「それもそうか。あ、俺、ちよつとうちに行つてくるわ」

「わかったよ、夕飯作つとくから、帰ったら適当に食つといてくれ。俺はバイトに行かねばならんのでな」

「ああ、いつもありがとうな」

働かずにパチンコ行くのかよと最初の方は

思っていたが、わりとマイナスを出さないのでは

まり責めることはしなかった。意外と、ああいう

のは当たるものなのかもしれない。

親父が出ていったのを確認すると、俺はタンス

に隠した一冊のノートを取り、じっくりと中を確

認した。

その日の夜、俺はあの計画を実行に移すため、

結衣に電話をかけた。

「もしもし、俺だ。文秋だ」

「文秋から電話なんて珍しいね。どうしたの？」

「あの計画を実行に移そうと思ってね。それで

前に計画を手伝ってほしくてね」

「あの計画って、ついに家出の決意固めてくれた

の？」

「ああ」

家出の提案をしたのは俺ではなく、結衣だった。

彼女曰く、俺と和也があんな父親に振り回される

のは見ていてつらいらしい。

「それで、いつ実行するの？」

「明後日の放課後を予定している。明日は俺のバ

イトの給料日だからな。軍資金は手に入れられ

る」

その夜、俺たちは綿密に計画を練った。

そして、ついに実行の日が来た。和也は俺の隣

で、とても緊張した面持ちで歩いていた。まあ、

緊張するのは当たり前だろう。家出なんて、ドラ

マとかくらいでしか見たことがない。しかも、そ

れを自分たちが実行しようとしているのだから。

俺ら二人の緊張感をほぐそうとしているのか、

結衣が他愛のない話を横でし続けていたが、俺ら

は相槌を打つことすらもできなかった。そうこう

しているうちに、電車に乗る駅についた。

「悪いな、こんなところまでついてきてもらっ

ちゃって」

「いいよ、あたしがついてきたただけだし。

そういえば、目的地はどこだっけ？」

「亡くなった母さんの実家さ」

「そうか、いつてらっしゃい」

「ああ、ここまでありがとうな」

「ありがとうね、結衣姉ちゃん」

俺たち二人が改札に向かって歩き出すため、振

り返った次の瞬間、結衣は俺の手を力強く掴んで

きた。

「待って！」

どうした？と言葉が出る前に彼女は俺に抱き

ついてきた。

「これだけは、伝えておきたくて」

「なんだ？」

「あなたのことを必要としている人は絶対にいる。少なくとも、わたしはあなたを必要としている。だから、あなたは、とても貴重な存在よ」

その言葉はなぜか、自分をとっても救ってくれるきがした。

「ありがとうな」それだけ言うと、俺たち二人は改札の向こうへ進んでいった。

この家出に至るまで、いろんなことがあったな。それを電車の中、寝てしまっている和也を見なが

ら思った。これまで、和也に無理をさせたくないという思いだけで、懸命に生きてきた。和也を守ることだけが、自分の存在意義だと思っていた。しかし、それを結衣は否定してくれた。もしかしたら、あいつは俺のそんな思いに気づいたのやもしれない。

「はは、あいつは、そんなに賢くないか」思わず言葉に出てしまった。

彼ら二人を見送ったわたしは寂しさに押しつ

それもそうか。

ぶれそうになりながら、駅の出口へと向かっていった。その出口の階段の下には見覚えのある男が立っていた。

「やあ、結衣ちゃん、お疲れ様」

くれ」

この家出騒動を巻き起こした柴岡兄弟の父・公一だった。

けた。

「最後の挨拶をしなくて本当によかったんですか？」

か？」

「したくても、できないだろう」

「それについては、後悔してない。自分が働けな

喫茶店に入り、注文をすると、早速話を吹っ掛

くなってしまったんだ。それに彼らを巻き込みたくはない」

そう、わたしはこの人の要望に沿い、彼らを家出に導いたのだ。彼は、一年前に難病を患い、それにより発作をよく起こすこととなってしまったため、当時ついていた職を解雇されてしまったのだ。発作持ちということもあり、仕事は見つからなかったため、息子のバイト代とパチンコで稼いだお金で生活しているのだ。いわゆるパチプロというやつらしい。その中でも公一さんは名の知

れている人であり、プラスを出すのが難しいパチンコで常に、成果をあげていたらしい。

「これから、どうするんですか？おじさんは」

「とりあえず、まともな職を探ささ」

「心理関係とか、どうですか？文秋が存在意義は弟を守るためだけだと思っていることも当てていましたし」

「あれは、親子だからわかることさ」

やっぱり、この人はすごいな。

「もう、文秋や和也君とは会わない気ですか？」

「会う資格は今日、失ったさ」

「いいえ、嫌でもまた会うことになりますよ」

「どうしてだい？」

「だって、わたしは彼と結婚します。その際に、

あなたのことも無理矢理招待します」

「え？」

さすがのおじさんも狐につままれたような顔をした。

「それは、文秋も了承しているのか？」

「いいえ、でも結婚します。わたし、一途なので」

その言葉に彼は大爆笑をした。

「そうか、そうか。文秋も結婚か。なら、いい高校に進学して、いい大学に行かなきゃなあ」

「もう受験まで、二か月きつていますけど彼、大丈夫でしょうか？」

「大丈夫さ、半年近く受験勉強した結衣ちゃんよりも成績いいんだから」

さすがの私もムツとした表情を隠せなかった。

それと同時にこの二人は親子なんだなとも思った。

あとがき

は当然といえることなのかもしれない。

「自分を犠牲にしても誰かを幸せにしたい」この感情は間違っているだろうか？

自分はそんなことは思ったこともないので、そのれの正誤を判定する資格はないが、この感情を抱けること自体が幸せなのだから、この感情は間違っているとはいえないと考える。

今回の話に出てくる親子にも守りたいものがある。なぜか、親子つてのは不思議と共通点があるものだ。そこから、絆というものが生まれるの

猫

柊光溜

私は、どこまでも自由に飛べる鳥に憧れている。
昔から鳥が好きだったわけでもない。自由に場
所を行き来したいわけでもない。

何故そんな憧れがあるかなんて、理由すらも、
いつ憧れを抱いたのかもわからない。だが、その
きっかけだけは確かだ。いつの日か、空を見上げ
た時に鳥が羽ばたいているのを見た。その鳥は別
段大きいわけでもなく、力強く羽を動かし飛んで

いたのでもない。そんないつでも見られるような
鳥が空を舞っているのを見た時。私もその鳥のよ
うに空へ自由に飛び立ちたいと思うようになって
たのだ。それからは空を見て、風を感じるたびに
そんな憧れが浮かんでくる。

それとは別に、私は町をふらつくのが習慣と
なっている。

何かを探す訳でもなく、ただ大通りを、商店街
を、住宅街を。そういった場所を訪れることが私
の習慣であり、幸福であった。

けれども、その幸福には何かが欠けていた。

景色から与えられるなんとも言い難い美しさ。

偶然の出会いから来る喜び。どれもが私にとって

幸福とは違うなにかを感じていた。

だから今日もこの違う何かを見つけることを

期待して見知らぬ町を訪れる。

八月。私は風見町に訪れた。

ここはわたしがまだ小さかったころに何度か

旅行で来たことがある。風見町は国内有数の観光

都市として有名であり、自然豊かな山々に囲まれ

た、のどかな場所だったと今でも記憶に残っている。

一番の思い出は、町の外れにある広い、広い公園での出来事だ。

その公園には、夏の日差しを喜んで咲き誇る、向日葵の花畑があった。その向日葵の花畑はまるで迷路だった。幼いころの私は、そこに迷い込み、一人彷徨っていた。

その後、私は本物の美を見たのだ。

その美しさは神々しいもので、幼いながらに触

れることすらためらってしまふほどだ。

だが、残念ながら今の私には、何を見たのか、何故美しかったのか、それらがまったく思い出せないのだ。

そして、その公園は今もうなくなって、ショッピングモールになっている。

それと同様に、風見町は私の知っている土地ではなくなっている。

そんな私の知らない風見町に訪れた。

駅を出る。

駅前のロータリーは都内顔負けの大きさと成

長を遂げ、昔見たあの古い、寂れた雰囲気はなくなってしまうていた。

遠くに風見の山々が見える。青く生い茂り美しい山々ではあるが、所々に建物が見られ、昔の印象とはまるで違った。

ひとつ、ため息をつく。

本当に、私の知っている風見町ではなくなっていた。

けれども、まだ私は希望を捨ててはいなかった。

あの商店街なら、きっと発展こそしているもの

にあった。

の大きく変わってはいないだろう。

そう思い、歩を進めることにした。

道中、確かに印象は変わってはいるものの全く

別の町ではないことに安堵した。森の静けさ。鳥

の鳴き声。そういったものはあまり変わってはい

なかった。

きっと、あの場所も変わっていないだろう。

商店街は確かに変わっていないかった。

本屋も、両親と買い物に行ったジャム屋も確か

それでも、何かが私の知っている風見町とは

違ったのだ。人通りが違うわけでもない、景色が

色褪せたわけでもない。ただ、何かが違ったのだ。

こんな町が好きだったわけではない。たまらず

に私は道を外れた。

涼しい山風が、妙によそよそしい。

この町は私の知っている町ではない。ここに来

るまでに理解していたはずだが、突き付けられる

とどこか寂しい。

商店街の外れ道が、徐々に山道へと変わっていき、

そんな記憶通りの道でさえも私には偽物に見えた。

日差しが出てきて、思わず目を背ける。

少し、疲れた。

思い返せば、私がこの町に来てから太陽を一度も目にしていなかった。

休める場所はないかとあたりを見まわしていると、獣道を見つけた。

きっと、光に照らされれば、私の思い出のよう

普段ならなんとも思わない獣道。

な風見町になるのだろうか。それでも、私は振り返ることなく、先へと進んだ。

そこに、黒い猫がいた。

山道は、緩やかで、新しい建物がある訳でもなく、ただ続いていた。

せ細っていて、冗談にもかわいらしいとか、美しいという感情はわかなかった。けれど、私はこの

猫に惹き付けられていた。

猫は私を見ると奥へと進んでいった。

自然と、追いかけていた。獣道は深く、木々に

覆われていて、進むにつれて空気が変わる。生暖

かい空気が涼しいものへ、冷たいものへ。

もう何分追いかけただろうか。再び、空気が変

わった。

顔をあげると、小さな広場があった。

陽光は暖かく、草は生い茂り、まだ人の、動物

の足跡を知らない。

猫はそこで横になっていた。

ぼろぼろの毛並みにやせ細った体。

どんな特別さもない、ただの野良猫だと、心の

底で理解しているけれど。私にはこの猫がこの町

のどんなものよりも神聖で、大切なものだと思っ

た。

もう何分、この猫を眺め続けたのだろうか。も

しかしたらこの猫は私の見た妄想なのかもしれ

ない。それでも私は呆然と立ち続けていた。

気が付けば、猫はもういなくなっていた。

その時、私はようやく知った。

私にとっての美しさはありのままにある、その

姿だったのだ。

この猫は私の生んだ妄想でも、運命を運ぶ存在

でもなく、ただ、普通の猫だ。

そんな事実を知れたことがただ、ただ嬉しい。

あの猫が、今後どう生きるか想像もつかない。

それでも、例えまた会った時にどんな姿であつて

も、あの猫はありのままの姿であり続けるだろう。

ああ。やつと思ひ出した。

私はきつと、あの向日葵の花畑であの猫に会っ

ていたのだ。

まだ幼く、何も知らなかったときに出会った本

物。

その尊さが私を喜ばせたのだ。

その喜びが、私にとって欠けていた幸福。

段々と、空が暗くなる。

少しだけこの感情を噛み締めた後、この場所を

後にした。

帰り道。夕日に照らされるこの町はやはり、私

の知らない町だった。

けれども、それは偽物でも、醜いものでもなく、活気に満ちた美しい町だった。

茜色の空にムクドリが群れを成して飛んでいた。

その姿を見て私の空への憧れが何なのか、今なら少しわかる気がした。

それは、その自由な姿が私にはなかったものなんでしょう。けれど、今私は地に足をつけ、歩いている。そのことにやっと気が付いた。だから、私

の空への憧れなんていつか無くなるだろう。そしていつの日か、こうして町を歩くことすらやめるのだろう。何かを求めるためではなく、今あるものを受け入れるために。

そう考え終えたときには、満天の星空が輝いていた。

あとがき

この作品を書いた時は部誌に乗せることなく
て全く考えておらず、夏休み中は全く別の物を書
いていました。そして自分の力と根性と怠惰に
よって間に合わないことを察したため急遽この
作品を引っ張り出してきました。

来年は自分の意思を強くして思ったものを書
き切りたいと思います。

旅

割と大きめの足跡

この世界は無限大だ。

平等なように見えて、不平等で。

でもすごくきれいでまぶしくて。

まだ見たことない景色はごまんとある。

全部じゃなくてもいいから、ゆっくり見て回ろう。

自分にとって都合の悪いものはゴミ箱にすてて、見なかったことにしたかった。

旅をするのに邪魔だったのは、ほかでもない私自身なのに。

これから先、私はどこを旅するのだろうか。

邪魔な私の足をちぎり取って、代わりに大きな翼をはやして飛んでいけとそう思う。

もつれてうまく歩けない足なんて、必要ない。

贅沢な私は綺麗な物だけを見ていたかった。

私はこれからも旅をする。

強欲で傲慢で怠惰な私は求め続けている。

私はこれからも旅をする。

例えば足がちぎれてなくなっている、ゆっくり

ゆっくり進むだろう

この綺麗で汚くて素晴らしい世界は、私一人に

は大きすぎる。

それでも精一杯、私は旅をするだろう。

どこにたどり着くかもわからずに。

あとがき

最後まで読んでくれた方々、本当にありがとうございました。
ぎいます。すごく痛い文章なので、読んだ方の記憶を消して回りたいです。安直な文章なので、特に説明などはいらないと思います、読んで感じたままです。来年は全く違うジャンルの作品を書くつもりです。またあとがきで会えたらうれしいですね。それでは！

幸せです！

正義の学級委員長

本当に自分は生きたいのだろうか？

そう思うときがある。

自己嫌悪ではなく、生きることについて考えている。

多分、意味はないんだと思う。

人間としての評価。

ほとんどの人間は、人類という大きな歯車のなか

に必須ではない。

天才は世の中にきつと必要だろうが、そうでない

人間の存在価値について考える。

天才を輝かせるため、パーツとして、誇りを持つ

て生きる。

代わりも、上位互換も、腐るほどいる。

じゃあ生きる意味はないのではないだろうか？

そう、あくまで自己満足でしかない。

幸せだと感じて、自分さえ満足していればいいの

だ。

うすい幸せと、うすい苦痛。

多くの幸せと、それに伴う苦痛。

どっちを選ぶのかはその人間次第だろう。

じゃあ、努力も悲しみも、嫌な感情はすべて不必

ただ、幸せでありたいと思うならそれでいいが、

要ではないか？

貪欲に幸福を願うなら、

正直なところ、わからない。

代償は必要だと考えてしまう。

けれど、生まれ持った才能次第で、幸せを制限される。

そうでなく、ただ、すべての人間が盲目に幸せだ

その幸せをいかに、多く享受できるかを、争って

と思える世界なら、それが一番。

いる。

でも、そうはうまくいってないみたいだから。

この世界をなんとなく嫌いになってしまう。

何となく過ごすのもつたない気がする

だから、幸せや、快樂などの甘さを求める。

生きる意味はないと言っておきながら、

そう解釈している。

幸せだと感じればいい！自己満足していればいい

い！と言っている。

そこら辺の人間が死んだところで悲しくはない。

生きること自体に、意味はないと思う。

しかし、その人間が友人なら悲しくなる。

動物的に、子孫を残すという本能は置いておいて

でも、死んだ人間など、しょせん肉塊だ。

だ。

僕の隣の席の友人が死んだとしたら、

しかし、それに意味を加えて楽しもうとするのは

大金をつぎ込まれたサルが、ただ、肉になる。

自由ではないだろうか。

その後、燃やす時間も労力すらも無駄だ。

でも、関わった人間が、「彼といろいろなことが
経験できて良かった。」

などとほざけば、そのサルの生きた意味はあった
事になるし、

涙を流せば、たんぱく質から、友人になる。

なんとも奇妙な話だ。

でも、それは決して役には立たない自己満足の連
続だ。

そこにいかに幸福を見出せるかが大切なのだと
思う。

これを見た未来の自分は、共感しているかもしれ
ないし、

読むのをやめなくなるのかもしれない。

生きる意味はないけれど、それに意味は加えてい

もしかしたら、いなくなっているかもしれない。

ける

例えば、その瞬間が幸せならそれでいいと言えば

手軽な快楽に身を委ねられる。

例えば、一日中ソファーでつべでも、見ていればいいのだろう。

けれども、それをしないのは、耐えた先のもう少し大きな快楽を求めるからだ。

なんとも傲慢で醜い事だろうか。

でも、そんな人間の薄汚さが大好きだ。

他人の理解を完全にはできないのを知っていて、それでも知ろうとして、頼ろうとする。

全て、自分の思うようになって欲しいから、情報を知りたがる。

なんとも恐ろしい事だ。

自分一人の力では足りないと思えば、他人を利用して幸福を見出そうとする。

生物的には、人間は他人と生きてきたのだから、うまく、他人と関わることは、難しいし、時間がかかりすぎる。

仮に、他人の人格を可視化できたら、そんな不安もなく、お互い幸せかもしれない。

そう思うのは、他人を利用したくなるし、利用されるのが怖いからだ。

自分が少しでも楽しく生きるためには手段を選ばない。

お父さんお母さん大好き

とんでもない事をしてるとわかっていても、やめられない。

先生も大好き

こころがすっきりして、清々しい気持ちになって

お友達も皆、とっても大好き

いる自分がいる。

ずーっと一緒にいてね

そうなのです。

皆で幸福を感じようね！

自分が一番だから、他人はすべて二番目。

こうやって汚く嘘をつく。とっても気持ちが良い。

だから、全員が近い価値で、好きで、嫌いだ。多少の優劣はあるものの、

自分という存在には勝てない。圧倒的な好意がある。

自分を崇拜している部分もある。

だから、他人が、自分の幸福のための道具に見える事もある。

でも、人間を頼ることが怖くもある。

向こうもそうかもしれないからだ。

そう考えると、愛する私さえ、道具に思われているかもしれない。

とっても恐ろしい話だ。

この僕を利用できるものとして考えているのが腹立たしい。

でも、仕方ないとも思う。自分も同じように思っているからだ。

自分の満足のために動き、生きる。

それが結論で、それこそが全てではないかと思う。

幸せであれば、なんでもいい。

合計が大切なのか、瞬間風速が大切なのか。

それはわからない。

でも、これを読んだあなたも、幸せになってくれ

ていると、あたしも幸せです。

とっても気持ちがいいですね。

あとがき

わざわざ、あとがきまで見てくれてありがとうございます。

見てくれて嬉しいので、好きな物の話をします。

僕は、ホテルとか旅行の空調の音が好き。

一日疲れたな、楽しかったな、と思いを馳せながら、

ベットの包容力に身を沈める瞬間。

寝るときは誰とも話さないし、意識を失うまでの、

ふわふわとした薄い意識の中の話。

普段は気にもとまらないような空調の音が耳に入っ

てきて、薄い意識の中で強く感じる。

でも、不思議と騒音に聞こえず、何とも感慨深く感じてしまう。

一日の思い出を、ほんの一瞬振り返る刹那に寄り添ってくれている。

私は、そんな空調の音が好き。

たからばこ

河野檸檬

愛も変わらず

前のめりしたマネキンの嬌笑が眩し 二十

二(じゅう)時のPARCOきらきら

千切られた花卉はらはら着地して 「すき」

も「きらい」も見分け付かずに

総武線止まっちゃったね HARBS のケーキ

とけちゃう早くしないと

ストローをマスク外して吸う人とマスク下

から吸う人の差異

会ったことないけど好きな人くらい、たく

さんいます愛も変わらず

アルゴン

「肉眼じゃ見えないけれど月面に LOVE と

×刻まれるって」

ハグをしたときの背中の温もりが爪の先ま

で満ち満ちていく

「教材を机の上に置きっぱで帰るとかまじ、
わけわからんよ」

シャーペンが壊れたと言う君に付き添って

LOFT へ向かうテスト後

ブローチの跡はくつきり 暑き日の新宿の

密度物語ってる

夢へ

チヨコベビー縮小した様なシャー芯の欠け

ら飛び来る 時速何キロ？

のりしおのポテトチップス食べるときくら

いヘルペス忘れさせてよ

スイカバーって案外ポリウムあるんだね

授業中でもシャクシャクシャクシャク

耳搔きは絵画修復するようにしてよね首は

触らないでよ

目眩くサインコサインタンジェント あな

たの夢に続く螺旋だ

しない

蛍光のピンクの発色いい感じ 持ち手がム

カデみたいだけれど

自転車の鍵探してて思い出す 拷問器具の

爪剥がすやつ

何気なく継るインスタ 投稿をしても画面
は生き返らない

さようなら、はじめましてを言う度に僕ら
脱皮をゆらと始める

爪剥げた死なないで僕かみさまに結構祈つ
た 母笑ってた

越える

クラウドファンディングを使い生爪を六百

個集める夢を見た

小さいのに異様に重い宝石の凶鑑に押され

坂駆け下る

半月と一番星を一息に結んだ先の白彼岸花

先生の手には碧を見た 内臓に近い画材にか

えりたくなる

「かっぱだ」と彼が指差す暗闇の奥からほ

んとにほんとにかっぱ

近くはないが遠くでもない

夢でしたあのキスのこと覚えてる？

『Je te veux』を弾く君の前髪

嘘ばかり吐いてはいても君の眼はどこか遠

時間さえ小休止する京の夕　貴方は純に愉
しんでいる

くの星の瞬き

名を捨てし白鳩天へ消え去れり　地には蹲

懶さは貴方独自の夕化粧　肺一杯の血で生

る老女が独り

きている

言葉は届かない

顎を地に付けしきりんの銅像が完成するの

は雨降りしとき

かなしみが妙なあかるさにかわるまで余白

をずっと抱えていよう

天使とのハグの仕方を神妙に考えている星

月夜かな

この部屋に僕はひとりでもみんなひとり

ひとりでやり過ごしてる

側鉛を降ろす私の中にある泉へ 月の射さ

ない夜も

あとがき

短歌という表現に出会って、改めて文字で表現することの幸せを噛み締めています。もしもよかつたら、あなたの作った短歌を僕に見せてください。たからものの交換をしましょう。

終わりに

ごきげんよう。高等科文藝部です。昨年とはある理由(天災+人災)によって部誌の刊行が出来なかったため、二年ぶりの部誌となります。

昨年はほとんど活動も出来ず、私の中では一年丸ごと吹き飛んだ感じで、未だに自分が最高学年であるという自覚が無いです。ただまあ、責任だけはいっちょ前についてくるもので、こうして睡眠時間を削って弱音を吐きながら編集しているわけです。

今年の鳳櫻祭のテーマは「翔破」らしいです。

文藝部は特にテーマを定めて書くことも無く、部誌を刊行する以外の活動もしないため、あまり関係ありませんが。

最後にはなりますが、今回部誌の発行につきましてお世話になった日光企画の皆様。我々の活動を支えてくださっている顧問の伊藤先生。そしてなにより、この部誌を手にとってここまで読んでくださっている皆様に心より御礼申し上げます。

令和三年度 文藝部副部長 蒙古山猫

メンバー

作品制作

（渡月見

元舜平大

蒙古山猫

黒川天

河野檸檬

割と大きめの足跡

柊光溜

正義の学級委員長

編集

蒙古山猫

『然らば、後に』 高等科文藝部部誌第拾巻号

令和三年度

発行 学習院高等科文藝部

主将 蒙古山猫